

甘木絞りの基礎知識① ~その起源と発展について~

1. 「絞り」とは何か？

生地を糸で縛ったり、縫い絞めたりするなど圧力によって防染する技法を用い、染色していくものを絞り染めといいます。多くの染色技法のなかでもっとも原始的といえ、世界各地で行われていました。そのため、独自に高度な発展をした絞り染めの文化をもつ地域も少なくありません。

我が国の絞り技術は緋とともに世界の最高位にあるといわれ、その技法は多岐にわたります。括りによる匹田(鹿子)絞り・三浦絞り、縫縮めによる平縫絞り・折縫絞り・杓目絞り、竹皮やビニールなど防水性のあるもので比較的大きな部分を防染する皮巻絞り・帽子絞り、桶の中に生地を入れて密封し、外に出た部分を染める桶絞り、太い丸棒に生地を巻き付けて縛る風絞り(棒染)、生地の両面から板をあて強く縛る板締などがあります。

絞り染めのその最大の特徴は、滲みを含めた微妙な色調の変化にあります。以下の特徴もまた重要な点です。

- ① 布の表裏両面を防染し、白く抜くことができる。型染め、筒描きでは両面に糊置きしないと両面を白く抜くことはできない。
- ② 100種類に近い、たくさんの技法がある。型染め、友禅染めなどでは過程は複雑だが、技法それ自体が多

いわけではない。

- ③ 布を染料につけて染める「浸し染め」のため、多色染めが難しく、ほとんどの場合、藍もしくは紅など一色である。多色にするには大変な手間がかかる。
- ④ 布を縫ったり、括ったり、巻いたりするので、布に凹凸ができ、それ自体が絞り染め特有の風合いを醸し出す。
- ⑤ 下絵や図案の型を使う技法もあるが、下絵などを使わずに手先の感覚を頼りに行う技法がある(蜘蛛絞り、手筋絞り、山道絞りなど)。
- ⑥ 文様を点や線で表現するので、友禅染めのように花鳥風月など具体的な文様表現は難しく、抽象的で簡略化された文様となる場合が多い。(注1・2)

2. 「絞り」の歴史

絞りの歴史は特にインド・中国が古いと言われ、中国の文献『魏書』「獻文六王高陽王雍伝」(注3)には、「奴婢委不得綾綺纈」(奴婢身分が絞り染めなどを施した衣服を着てはいけない)とあり、4-5世紀にはその生産が見られ、中央アジアのアスターナ古墓(6世紀)(注4)からは絞りの布が出土しています。日本では、『日本書紀』に天智天皇6(667)年に「錦十四匹、纈十九匹を送る」と記され、『法隆寺献物帳』には「纈」、

『東大寺献物帳』には「目交」などが見られます。正倉院宝物の中には、襷文をもつ纈纈が知られており、その遺品は奈良時代に遡ります。平安時代には、『延喜式』の中に「大纈」「一目纈」「二目纈」「作目」「目染」「纈」「くくり染」「くくし染」などの呼称があり、絞りの技術が発展し、その種類が増えている様子が分かります。鎌倉時代になると「重目結」「三滋目結」「三目結」などが散見し、室町時代中ごろから江戸時代初頭に盛んに作られたのが「辻が花染」でした。このように近世にかけて、絞り染めの文様表現も大きく展開し、最高の意匠が開きました。江戸時代になると、その生産地も多くなったようで、高瀬(肥



「筑前甘木絞り繪圖」作：佐野至

後)、豊後、有松・鳴海（尾張）などは名物としてその名をはせました。

3. 甘木絞りの起源・発展と終焉

甘木絞りがいつどのように始まったのかは様々な説があり、それは以下の三説にまとめることができます。（注5）

- ①豊後の人、中津在住の医師である三浦氏の妻女が甘木地方に絞りを伝えられた。
- ②豊後・中津木綿の晒しを行っており、豊後絞りの制作過程の一部を甘木で担っていた。
- ③『福岡藩民政誌略』によると、福岡の孫兵衛を始祖とする博多絞り（紅絞り）が甘木に伝えられた。

また、染織が盛んだったと思われるいくつかの傍証もあります。万葉集には筑紫綿に関する和歌（注6）があり、また、『延喜式』によるとこの筑紫綿は中央に貢として四千屯送られ、武具制作に供されたといえます。筑紫では綿花が重要な栽培作物でした。さらに、小石原川は水量豊富な清流で、石灰質を含んだ水質が木綿晒しに適しており、中津木綿の晒しが盛んに行われていました。この小石原川での甘木絞りの布晒しは後年、筑前甘木名所十景になるほどでした。甘木絞りを施す綿布、そして晒しに適した川の存在は染織生産を行うに十分な条件がそろっていました。

元禄4（1691）年の磯貝捨若著『日本鹿子』には、九州各地の染織品の名産が記され、筑前は「帯、縞織物」、筑後は「紅花」が見え、絞りでは肥後の「高瀬絞木綿」、豊後の「黒紺布絞木綿」があります。また、『筑前国統風土記』には「茜草、上座郡山中にあり、国中所々藍作れり」の文言があり、何かしらの原始的な染色が甘木周辺で行われていたと推測できます（注7）。文政年間（1818－1830）には、甘木に染工9戸があったことが記されており、絞り染めが産業として盛んだったようです。江戸時代の風俗について書かれた喜田川守貞著『守貞漫稿』によると、文化・文政頃までは鳴海絞りをを用いたが、天保年間（1830－1843）には博多絞りをを用いたと記されており、産業として発展している様子が伺えます。

明治10（1877）年に開催された第一回内国勸業博覧会の出品解説には、博多・甘木の絞り染めの年間生産額が全国一位と書かれています。大正3（1913）年には甘木の柳原芳太郎氏が型付け絞りの特許を取得し、生産高は30－50万反に及び、販路は国内のみならず韓国や台湾にも拡大し、最盛期をむかえます。「筑前しぼり」の

名で出荷されていたものが、「甘木絞り」として売られるようになるのは大正13（1924）年ごろになってからでした。しかし、昭和17（1942）年に繊維類統制によりほとんど休業状態となり衰退の道をたどり、昭和26（1951）年には、産業としての甘木絞りは終焉を迎えます。

この衰退と終焉の原因は、甘木絞りが晒し、型彫、絵刷、絞り、藍染、糸抜、整理、仕上げと多くの過程が細分、分業化されていたことによるといいます。つまり、生産が軌道に乗れば大量生産も可能な分業化ですが、製造過程の一つでも廃業してしまうと、製品として完成しないという思わぬ弱点があったのです。

歴史の中に埋もれかけている「甘木絞り」ですが、産業としては終焉を迎えましたが、家庭などで細々とその伝統を守り続けてきた人々がいました。また、現在も団体として活動しながらその技術の保持に努めている方々もいます（「甘木絞り保存会」「甘木絞り保存伝承の会」「シルバー人材センター甘木絞りグループ」）。近年では、甘木絞りの伝統を守り、そのすばらしさを後世に伝えるため「甘木絞り連絡協議会」が新たに発足し、多くの方々に甘木絞りの魅力を伝えるため活動しています。

（副館長：遠藤啓介）

注1：（社）日本工芸会編『日本伝統工芸 鑑賞の手引き』同会発行 2000年

注2：榊原あさ子『日本 伝統絞りの技』紫紅社1999年

注3：魏書は6世紀に書かれた北魏（386－534）の正史ですが、内容は4－5世紀のことが書かれています。

注4：ウィグルの古墓群。シルクロードで名高いトルファン市にある高昌国と唐代の住民の墓地とされています。

注5：甘木歴史資料館『甘木絞り』同館発行 1991年

注6：巻三・沙弥満誓作「しらぬい筑紫の綿は身につけていまだは着ねど暖かけく見ゆ」

注7：鈴木信康「筑前志ぼりの系譜」九州産業大学芸術学部研究報告第11巻 1980年



◆発行日：平成28年1月11日

甘木歴史資料館

◆住所：〒838-0068 福岡県朝倉市甘木216-2

◆TEL/FAX：0946-22-7515

◆http://www.city.asakura.lg.jp/ama-reki/